

## 受難の主日

ルカ 23・1-49

2013. 3. 24 9:30 ミサ

オリビエ・シェガレ

(パリミッション会司祭)

ミサの前の枝の行列の時に、イエスのエルサレムへの入城というエピソードを聞きました。群衆の人々がオリーブの枝を手に振って、熱狂的に歓迎し、賛美しながら歓喜を表していた。主人公の中にファリサイ派の人々だけが喜ばず、ぶつぶつ不平を言っていた。人間だけではなく、子ロバの役も注目されていた。車なら新車のように、誰も乗ったことのない子ロバだと。旧約の古い時代、ロバは代々の王が乗っていた動物だったが、イエスの時代では庶民的な乗り物で、人々にとって身近で大切な交通手段の一つで、生活に密着していた存在。ロバは軍隊用で侵略のシンボルであった馬と違って、謙遜と平和の象徴でした。乗り物として子ロバを選択しているイエスは、権力の側ではなく、傲慢な君主としてではなく、暴力を揮わない、穏やかな、謙遜の姿でエルサレムにお入りになり、十字架に向かっています。この箇所を読んだ時に、先日のコンクラーヴェで教皇として選ばれ、アッシジのフランシスコの名前を選んだベルゴリオ枢機卿の姿が思い浮かんで来ました。新聞の報道によるとブエノス・アイレスの大司教になった後に、代々の司教が住んでいた宮殿ではなく、普通の住宅アパートにお入りになり、自炊をしていたそうです。車を持たずに、一般市民の交通の便を使っていたそうです。そして教皇に選ばれた直後、宿舎に戻らなければならなかった時、用意されていた教皇用の高級車を断り、他の枢機卿と一緒にマイクロバスに乗ることにしたと。まさに子ロバに乗り、エルサレムに入ったイエスのような姿勢を示していたと言える。

ルカの受難物語に出るイエスの入城の場面は、それに相当する他の福音箇所と比べて、平穏で、大きな衝突が見られません。まさにパウロの言葉にあるようにイエスは「自分を無にして、僕の身分となり、へりくだって、十字架の死に至るまで従順でした。」またルカ福音書には、他の福音書にない、イエスの深い思いやりやゆるす心を示すような三つのエピソードが出ている。一つはイエスの苦しみをみて泣いている女性を慰める場面。苦しんでいる私のためではなく、これから様々な苦しみに遭い泣くだろうあなたがたと子供のために泣いた

方がいいというイエスの話し方が感動的です。そして一緒に十字架に付けられ、回心して、イエスに救いを願う犯罪人の話。「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と。重い罪を犯したこの人へのイエスの答えはいかに慈悲深いものか。そして罪深い私たちにとって、この言葉は温かい希望を与えてくれる。もう一つルカにしかない言葉は、十字架にかけられた最後の言葉です。「父よ、わたしの霊を御手に委ねます」。ルカの福音書は、最後の最後まで人々へ愛を示し、神に信頼し続けたイエスの姿が伝わっています。一生の間、小さき人々と共に歩んできたイエスが最後まで彼らの苦しみや挫折と共に味わうが、英雄としてでもなく、悲惨な姿でもなく、穏やかな死に向かっています。彼の目指していた神の国の夢は実現しそうもない。闘いの全ては無駄になりそうです。皆に罵られ、親しい人に裏切られ、弟子に見捨てられ、死んで行かれる。これ以上虚しい死に方はないでしょう。全ては失敗に終わったかのようにですが、それにも関わらず、父への信頼を失わず、全てを父の手に委ねていきます。この委ねに対して、父なる神の答えは復活であります。神様が無とされたイエスを新しい命の芽生えとしてくださる。

イエスに従おうとするわたしたちも、イエスと同様に財産やこの世のいのちへの執着を捨て去り、永遠の命に生きるように呼ばれています。わたしたちは、努力を通して蓄えてきたもの、知識も、体力も、財産も手放して、裸になり、いつか死んでいきます。人間なら苦しいこの運命に向き合っていくしかありません。婦人のように主の慰めを受け、涙を忘れ、犯罪人と同様に罪をゆるされて、イエスと同じように全て御父に委ねて、穏やかな死を迎え、永遠の命に与ることができますように祈りたいと思います。